

# 米国ジャーナリズム史における政治的独立性 の「神話」

Oi, Shinji / 大井, 眞二

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / 社会志林

(巻 / Volume)

56

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

137

(終了ページ / End Page)

149

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021077>

# 米国ジャーナリズム史における 政治的独立性の「神話」

大 井 眞 二

## 目 次

### はじめに

1. 米国大学におけるジャーナリズムスクール
2. ジャーナリズムスクールとジャーナリズム史
3. 革新主義と批判的ジャーナリズム史
4. ジャーナリズムの政治文化史

### 結 語

### はじめに

ジャーナリズム史の用語は、歴史的パースペクティブにたつと、比較的最近の造語に過ぎないが、ジャーナリズムに関する歴史的研究は長い歴史をもつ。その歴史は、活字文化の誕生から特権的形態 (Brian McNair 1998: 4) としての近代のジャーナリズム文化の誕生に至るまでを射程に入れるだけでも、新しいジャーナリズムの文化の形成に伴い絶えず、新しい研究のジャンルが発展し、それぞれの時代の視座から様々な研究の取り組みがなされてきた。しかし、1970年代以降、発展著しいメディア史とジャーナリズム史の境界が消失し、ジャーナリズム史は一種のアイデンティティの危機に直面している。さらに、この危機は、現代のジャーナリズムのアイデンティティの危機に通じるものであり、ジャーナリズム学とは何か、何のためのジャーナリズム学か、だけでなくジャーナリズム史はジャーナリズム学においていかなる位置を占めるかの、根源的な問題を突きつけている。

ジャーナリズム史の起源をさかのぼると、その研究は明らかに2つの志向性に動機づけられて展開してきた。第1はコミュニケーション手段の発展に関する知的な関心に由来する。例えば、The Printing Press as an Agent of Change (1979) において、Elizabeth Eisensteinが<sup>3</sup>、政治的、社会的及び文化的な生活において、印刷機が惹起したきわめて重大な構造的変化を明らかにしたように、コミュニケーション手段やメディアに対する様々な分野の研究関心は、コミュニケーション史やメディア史だけでなく、ジャーナリズム史研究にとっても研究の重要な契機を提供した。しかし他方で、第2の起源は、第1のそれとかなり趣を異にし、かなり職業的である。主として商業的動機か

ら17世紀から18世紀に誕生した新聞は、政治的、党派的な用具の時代を経て、Habermas流に言えば、19世紀半ば以降徐々に公共圏の乗り物であることを止めて、ニュースを中心とする様々な情報（特に娯楽）を売り物にする商品に転じた。こうして、商品としてのニュースを生産する労働が徐々にプロフェッショナル化するに従い、そのプロフェッションのアイデンティティを過去に投射し、ジャーナリズムの歴史を自らのために構築する衝動が生まれた（Kevin G. Barnhurst and John Nerone 2000: 17）。

本稿は、後者の職業的な起源から発したジャーナリズム史研究を、米国のコンテクストにおくことで、第1に、ジャーナリズムとジャーナリズム史がどのような関係性をもってきたか、そうした関係性がジャーナリズム史にもたらした他の歴史研究にはない特徴と問題点を考察する。この特徴と問題点は、米ジャーナリズム史における神話生成と密接な関係をもっている。そこで第2に、そうした神話の1つであるジャーナリズムの党派性、政治的独立性について考察をすすめる。米国では、ジャーナリズム史の職業的起源は、かなりの部分ジャーナリズムスクールの教育と密接な関係をもっている。この関係性がジャーナリズム史にいかなる影響を与えたか、現に与えているかも併せて考察する。

## 1. 米国大学におけるジャーナリズムスクール

米国においては、ジャーナリズム教育は、20世紀初頭に高等教育に導入されるようになったが、こうした最初の組織的な試みは、衆目の一致するところ、南北戦争の敗軍の将Robert E. Leeによって始められた。南北戦争直後、Leeは、Virginia州LexingtonにあるWashington College（後にWashington and Lee Collegeとなり現在はWashington and Lee University）の学長となった。Leeは、戦争で荒廃した南部再建の一助としてジャーナリズム教育を構想した（Mirando 1995: 14）。公表された計画によれば、Washington Collegeは、ジャーナリズム、ビジネスそして農業化学を学ぶ学生に奨学金を提供することにした。大学の記録は、Leeの呼びかけに応じて何人の学生がジャーナリズムを学んだかを示していないが、1869年に提供された奨学金は数年しか続かなかった（ibid. : 24）。

最初のジャーナリズムコースが提供されて以来、アカデミックな学としてのジャーナリズムは、常に多くの懐疑論に晒されてきた。実際、多くのジャーナリストは1960年代まで大学教育とは縁遠い労働者階級の出身であり、Collegeの学位をもっていなかった。しかし1960年代までに学士号は、ジャーナリストとして雇用される最低条件となり、最近のある米ジャーナリスト調査では、米国のニュースメディアで働くジャーナリストの中で、学士号をもたないものは11%にすぎないことが明らかにされた（Weaver et al. 2007: 42-44）。しかし皮肉なことに、20世紀末までに、大半のジャーナリストがジャーナリズムの学位をもつようになったのにも関わらず、アカデミックな学としてのジャーナリズムを疑問視するのは、大学の経営管理者とコミュニケーション学者であり、彼らはジャーナリズムコースを、知的な探求よりもむしろ記事を書くにすぎない「単なる実践的な

(mere nuts and bolts)」教育と考える (Medger 2005: 206)。

こうして、多くの大学のジャーナリズムスクールは、草創の時代から、所属する大学の経営管理者や他の学問分野の学者を納得させるような方法で、1つのディシプリンとして自らを定義する問題を抱えてきた。この理由は、一方ではジャーナリズムの文化に、他方で大学の文化にさかのぼることができる。ジャーナリストは生まれるものであって教育されるものではないという態度は、長い間多くのジャーナリストに共有されてきた。こうした米国ジャーナリズムの反知性主義 (Medger 1999: 64) は、大学の文化に自らを位置づけようとするジャーナリズムスクールにとって重大な影響を及ぼした。

多くのジャーナリスト出身者を教員として抱えるジャーナリズムスクールは、劇的な変化がジャーナリズムプログラムに荒れ狂う1950年代に、大学におけるジャーナリズム研究の存在理由を十分主張することが出来なかった。この大きな荒波を引き起こしたのは、それまでジャーナリズムプログラムに付属していたコミュニケーション学であり、誰がジャーナリズムを教えるべきかを支配してきたルールをラディカルに改めることになった (Medger 1999: 56)。ジャーナリズムとコミュニケーションの異種混合は、発展著しいコミュニケーション学を取り込もうとする大学経営の側面と、コミュニケーション学との相違を明らかにし、ジャーナリズム学の独自性と必要性を訴えるジャーナリズム学者の能力不足によってもたらされた。しかし、20世紀に技術がさまざまな種類のコミュニケーションのオーディエンスの規模を拡大するに従い、コミュニケーション学の発展は不可避であった。こうして、ジャーナリズムスクールにおけるジャーナリズム学は、1960年代及び1970年代に自身のディシプリンがラディカルにつくり変えられるのを目撃したのである。

## 2. ジャーナリズムスクールとジャーナリズム史

こうした米国大学におけるジャーナリズムスクールの不安定な立場は、一方ではジャーナリズム教育を通して、多数の学生をジャーナリズムの現場に送り込むことで、大学におけるその存在理由を示し、他方で研究志向を強める大学にあって求められる一定水準の研究実績を挙げ、学としてジャーナリズムの存在価値を示さねばならない、という二重性に起因した。ジャーナリズムスクールにおけるプラクティカルな教育科目は、職業学校のそれと揶揄され、ジャーナリズム学者の研究論文は、隣接するコミュニケーション学やメディア学の分野から質の低さを嘲笑される現実、2つの方向に引き裂かれる現実から生まれたのである。

大学におけるジャーナリズム教育の開拓者は概して、教育を通してジャーナリストの地位を高めるだけでなく、既存のジャーナリズムのあり方を批判し、理想のジャーナリズムを構築する手段として学としてのジャーナリズムを構想し、それを大学に位置づけようとした。学としてのジャーナリズムを正当化する目的をもって、主としてジャーナリズムスクールで出版されたジャーナリズム史書も例外ではなく、ジャーナリズムの実践の歴史を書くことに向けられた。これらの著作は、ジャーナリズム教育のために利用される目的で書かれるもので、一般的にプロフェッショナルな生活

経験をもとにして、それがもつ情熱と自己利益をもって書かれる傾向があり、しばしばロマン主義的に解釈される傾向をもっていた。しかし、教育的な目的をもって書かれるジャーナリズム史のこうした傾向は、他のプロフェッションの歴史にもある程度共通するものであるが、歴史学一般の厳密な方法論から見れば、規範的な歴史とでもいべきものであり、歴史学の規範からの逸脱と見られることになった。ジャーナリズム史はまた、自身の正当化に関して、他の歴史研究とは異なる使命をもち、自身の正当化に関して、いかにして冷静客観でいられるか、の問題を提起することになった。こうして多くの歴史家にとって、ジャーナリズム史は「歴史のプロフェッションの僻地」(Schudson 2003: 65)と見なされることになった。また、当然のように、ジャーナリズム史は、ジャーナリズムスクールで書かれるだけでなく、社会におけるジャーナリズムの重要性が高まるにつれて、コミュニケーション学やメディア学の歴史的研究や一般史学の立場からも執筆されるようになった。

こうしたジャーナリズム史の後進性は、早くも1959年歴史家Allan Nevinsによって指摘されることになった。彼はジャーナリズム史の記述の薄さ、方法その他の一貫性の欠如に問題を見だし、従来のジャーナリズム史が編集者と論説を過度に重視し、ニュースと記者を等閑視したことを批判するだけでなく、見逃すことのできないこととして「嘆かわしいほど無批判であり、場合によっては不誠実である」と論難したのである(Nevins 1959: 418)。

確かに米国の大学においてジャーナリズムスクールが設立される時期は、ジャーナリズムのプロフェッショナル化がすすむ時期と重なり、両者は相互に影響を与えつつ発展したが、ジャーナリズム教育がアカデミックなカリキュラムに取り入れられる時期に、ジャーナリズム史はジャーナリストとジャーナリズムに必要とされる集団的アイデンティティを提供することができた。こうして、ジャーナリズムスクールは、野心に燃えるジャーナリストに道徳的実例を提供する歴史を必要とし、ジャーナリズム史はこうした要請に応えることになった。

ところで、プロフェッショナルリズムの発展と重なるジャーナリズム史は、1830年代初期のペニー・プレスの台頭に対応して出版されたFrederic Hudsonの*Journalism in the United States, From 1690 to 1872* (1873)にさかのぼることができる。同書は、プロフェッショナルリズムの概念に結びつけられる米ジャーナリズムスクールに、ジャーナリズム史を語る1つのモデルを提供したが、Hudson自身は歴史家ではなく、New York Heraldの編集局長であった。続いて、20世紀に入って3つの類似した枠組に立つジャーナリズム史研究が生まれた。それらは、James Melvin Leeの*History of American Journalism* (1917)、George Henry Paineの*History of Journalism in the United States* (1920)そしてWillard Bleyerの*Main Currents in the History of American Journalism* (1927)であった。

プロフェッショナルリズムの発展を下敷きにした古典的テキストは、衆目の見るところ、依然としてFrank Luther Mottの*American Journalism: A History of Newspapers in the United States Through 250 Years: 1690-1940*であった。初版は1941年に刊行され、数次にわたって(1947, 1950, 1953, 1962 and 2000)リプリントされた同書は、進歩の概念を中心に組織され、ジャーナリズムの

発展とプロフェッショナルリズムにおけるもっと大きな進展を結びつけ、さらに米国とそのデモクラシーの制度を結びつけた。Mottのジャーナリズム史のアプローチは、プロフェッショナルリズムの発展を教えるジャーナリズムスクールの目的に適合的で、ジャーナリズム教育が幼少期から少年期、そして青年期を経て、いまや成熟期に入った（Sloan 1991: 219）といった進歩の概念と共鳴するものであった。

### 3. 革新主義と批判的ジャーナリズム史

#### 革新主義

それぞれの歴史的時代は、独自の歴史的理解のパラダイムをつくり出す。支配的なパラダイムは、新しい政治組織とジャーナリズムのイメージを生み出す。20世紀の初頭、支配的な革新主義の歴史学は、ジャーナリズムをプロフェッショナルリズムつまり政治的独立と客観性に向かう一連の段階を通じて発展したものとして描き出した。すなわち、1900年代初頭までに、ジャーナリズムは、政府、政党そして商業的企業の悪しき影響から自らを解放したのである（Schudson 1978: 39-43）。こうして、ジャーナリズムは、政党や企業といった有害な外部の権力からだけでなく、党派的編集者や所有者といった内部的権力からも自由を獲得した。企業や政党にサービスを提供するバイアスのかかったパーソナルな機関紙の代わりに、ジャーナリズムはバイアスのない情報と公平な分析を提供することでアメリカのデモクラシーにとって不可欠のプロフェッショナルなパブリック・サービスとなったのである。

上述のような、しばしばWhig史観に対比される米国の革新主義史観は、ジャーナリズム史を善悪（good vs. evil）の闘争と見なす歴史解釈の立場であり、単純に図式化すれば、そこで描かれる善は自由とデモクラシーの支持者であるジャーナリズムとジャーナリスト、悪は利己的な目的のための自由とデモクラシーを解体しようとする勢力となる。そこで語られる歴史は当然のコロラリーとして、社会の進歩としての歴史であり、無限の発展を遂げていく社会というイメージが投影されている（大井 1999: 10-11）。こうした歴史解釈は、そのパラダイムの中に新しい歴史解釈が生じる余地を全くなくしてしまうのである。

例えば、米国では、ジャーナリズム史の教科書として多く使用される「The Press and America」は、革新主義的歴史解釈にたって、ニュースはいかに機能するかについての旧式の、神話的な定義を利用し続け、新聞がニュースをつくるのではなく、ニュースが新聞をつくるといった立場をとる（Emery and Emery 1999: 7）。ジャーナリズムスクールのジャーナリズム史研究者は、依然として頑に人文学的・非理論的であり、過去に関する革新主義またはWhig的な見解に執着している。その原因は、そうした見解が、多くの米ジャーナリズムスクールが設立された1920年代、1930年代の間歴史家の間でもっとも重要な解釈モデルであったことにあり、また、ジャーナリズム史研究者の多くはまた、歴史研究者としての訓練を十分受けていないことによる。こうして彼らは、自己中心的で、一般の歴史的研究を余り参照せず、歴史的説明としてメディアの影響を誇張する解釈を提



供している、と批判されるのである (Schudson 1997a: 463-467)。彼らはまた、コミュニケーションそれ自体、あるいは特にコミュニケーション理論にほとんど関心を示さず、依然として学問の世界の二級市民にとどまっている。

また革新主義は、保守主義を克服されるべき害悪としか見ないので、米国社会に対して、ジャーナリズムがいつの時代にも存在する有力な保守主義思想をいかに支えたかといった視点は、革新主義的解釈では扱うことが出来ないのである (McKerns 1977: 88-92)。こうした革新主義的解釈は、主として1970年代以降、Michael Schudsonらによって「自然史」の一形態として退けられことになった。自然史は典型的に、因果的要因を主題化することなく、出来事の記述的な年表を提示する (Schudson 1978: ch. 1)。革新主義は、ジャーナリズムを自由に向かう独自の内的な、目的論的な発展の道をたどるものとして描き出す。従って、ジャーナリズムとその環境との関係性は問題にされないままとなる。

こうした革新主義的な歴史解釈に対して、1970年から後半から1980年にかけて、修正主義やコンセンサス学派といった批判的なジャーナリズム史解釈が生まれてきた。そうした動きの先頭に立って、異なるアプローチと方法で研究する必要性を最初に問題提起したのは、James Careyであった。彼は研究誌 *Journalism History* の創刊号に掲載された論文「The Problem of Journalism History」(1974)において、ジャーナリズムの文化史を主張した。彼は、現在の「ジャーナリズム史の研究には相変わらず何か当惑させられる」(Carey 1974: 3) ことを指摘し、研究者が対象とする歴史的出来事について、人びとはどのように考えているかを究明することができるようなアプローチを主張した。「われわれは、われわれの仕事をあまりにも狭く、あまりにも控えめに定義してきたのであり、かつわれわれが研究する問題の範囲、及びわれわれの知識のためにする主張を狭めてきた」(ibid.: 4) と主張した。彼は、ジャーナリズムの制度内のジャーナリストを現実には追究することを全くしない、制度的な歴史の過剰の問題を指摘し、さらに自由や知識の拡大が、発展の各段階にそって直線的に発展していく、というリニアな進歩の歴史に反対し、その代わりに過去における意識の研究の必要性を説いたのである。こうしてCareyは、ジャーナリズムは、オーディエンスに行動と感情のための、モデルと状況を評価する方法を与え、そしてジャーナリズムは全ての文学的行為とともにこれらの質を共有する」(ibid. 5) と考えた。

## ジャーナリズムの社会史

Careyのジャーナリズム史の文化的アプローチを、革新主義の歴史解釈に対する批判的歴史のバースペクティブに位置づければ、ジャーナリズムは時代を超えて取り巻く文化との相互作用から結果的に生まれたと主張するRobert Parkの「The Natural History of the Newspaper」(1925) や「News as a Form of Knowledge」(1940) は、その系譜の最初に登場し、さらに社会学的アプローチを促進したSidney Kobreも系譜に連なることになる。Kobreは、一連の書籍で四半世紀にわたって—Development of the Colonial Newspaper (1944), Foundations of American Journalism (1958), Modern American Journalism (1959), The Yellow Press and Guided Age Journalism (1964) 及び

The Development of American Journalism (1969) —ジャーナリズム史は環境的影響を考慮に入れなければ理解され得ないと主張し、都市の成長や広告メディアのような歴史的要因の影響を究明した。

今日、米国ジャーナリズムの標準的な社会史として評価されるのは、Michael Schudsonの *Discovering the News* (1978) である。プロフェッショナルジャーナリズムの制度内の発展として政治的独立や客観性を説明する革新主義の解釈に対して、彼は、ジャーナリズム史を1830年代のアメリカ社会を揺るがすさまざまな変化の文脈に入れて、言葉の本来の意味の文化的-歴史的説明を試みた。彼によれば、1830年代に、ミドル・クラスつまり「ブルジョワ」に相当するものの革命が起こり、そこでは市場もマス・デモクラシーの制度も拡大して白人成年男子を含めるようになった。こうしたミドル・クラスの包摂とそれに伴う制度的・文化的変化は、新しい、現代的ともいうべきジャーナリズムが生まれる社会的背景であった。この変化は、本質的に異なる新しい商品たるニュースと、現代的なジャーナリズムの経済的資源と文化的需要をつくりだした。

1830年代以前、米国の至るところで、高価で商業的で党派的な6セント新聞が読まれたが、その流通と訴求の対象は社会的エリートに限られた。党派的な新聞は大抵、政治家の物心両面の後援の下で、主として意見と論評を掲載した。しかし、1830年代の民主的市場社会の拡大は、政党の資金提供への全面的な依存からジャーナリズムを解放し、いわゆるペニー新聞は、政治家との関係を断ち切り、大衆的読者にニュースを売ることから得られる利益と広告収入を財政基盤とすることになった。「社会的絆や政治的な仲間意識 (fellow-feeling)」に依存する収入源は、市場に基礎をおく収入に取って代わられた (Schudson 1978: 18-25)。こうして、急成長する商業市場とともに、Jacksonian時代は、現代アメリカ・ジャーナリズムの出現にとって決定的に重要な多くの政治的变化を見ることになった。

Schudsonにとって、ニュースの現代的概念は、社会の非政治化に依存する。言い換えれば、ニュースは、世界に関する非論争的で、非政治的で、かつ事実に基づく情報を提示するという主張とともに、社会的コンセンサスに依存する (Alexander 1981: 29) とし、これらの共有された社会的価値を、Jacksonian時代のリベラルな個人主義の勝利に見出すのである。こうして彼は、社会の進歩を促進するジャーナリズムとそれを阻止しようとする勢力の対立ではなく、米国の文化的なコンセンサス、つまり貪欲な個人主義のヘゲヘゲモニーという、コンセンサス学派的歴史解釈を採っているように思われる (Willentz 1982: 44-45)。米国の歴史は、対立する社会的構想に彩られる歴史ではなく、また資源や社会の将来の方向を巡るイデオロギイ的闘争ではなく、むしろ共有される経済的リベラリズムを特徴とするコンセンサスに貫かれるものであった。

こうしてSchudsonは、現代ジャーナリズムの政治的独立と客観性の起源に関して、鋭い分析を提供する。1830年代に、潜在的収益のため政治的機能を不用にした大衆的なジャーナリズムの出現を見る彼の視点は、Habermasの公共圏を巡る議論と重ね併せることが出来るかも知れない (Habermas 1989: 183-184)。しかし、Schudsonが今や認めているように、党派性は19世紀終わりまで存続したのであり、19世紀全体を支配した大衆的、党派的忠誠を見落とすことで、新聞の党派的提携を見落としているのである。



## 4. ジャーナリズムの政治文化史

### ペニー新聞の神話

ところで、アメリカ・ジャーナリズム通史において、ペニー新聞の誕生と発展はいわば「神話」とでも言うべき位置を占め、アメリカ・ジャーナリズムの常識の一部となっている。その神話は主としてペニー新聞の「革命」性を中心に展開し、ジャーナリズムの歴史的研究だけでなく、現代のジャーナリズムスタディーズにもさまざまな弊害をもたらしていると言っても過言ではない（詳しくは、大井 2009bを参照）。新聞の政治的独立性と党派性を例に取れば、ペニー新聞は、一般にジャーナリズムの「暗黒時代」（Mott 1962:167-180）と称され、新聞に党派精神が横溢し、建国時代の全体を覆うことになる政治ジャーナリズムの時代の幕引をすることになったとされる。かつて紙面を我が物顔で闊歩した政論は衰え、ニュースを取材し印刷することが新聞の主目的となったのである。こうして、ジャーナリズム「革命」は、現代的意味のニュースが新聞の中心となるニュース「革命」でもあり、米ジャーナリズムが、「客観性原理」へと歩み出す契機となったと理解されるのである。しかし、こうした議論は、すでに述べたように、19世紀終わりまで党派性は存続した事実を無視し、ペニー新聞の神話形成に寄与することになる。

### 党派性の政治文化とジャーナリズム

植民地時代のジャーナリズムを語る時、必ず引用されるのがBenjamin Franklinである。彼をその時代のジャーナリズムの典型とするのはいささか問題があるにしても、彼を含めた植民地時代のジャーナリズムは、はじめ商業的動機をもって新聞を創刊した。しかし、新聞は、米独立革命に先立つ10年前ころから政治化され、革命時代はもちろん、新国家建設の時代にあっても、さまざまな党派や政党は多くの主導的新闻に助成を与えたり、スポンサーになったりするようになった。例えば、ペニー新聞の有名な編集者Horace Greeleyである。彼は、1830年代地方の週刊新聞でキャリアのスタートを切り、New Yorkに移って1834年文学雑誌を発行した。1840年彼はWhigのキャンペーン新聞Log Cabinを始めた。同紙は短命だったが、8万に至る部数をもった。そして彼は1841年、自身の新聞New York Tribuneを始めた。Tribuneは1830年代にNew Yorkをはじめとして主要都市にあらわれた、新しい種類の安価で、商業志向の最初の「ペニー新聞」の1つであった。はじめおよそ1万の部数をもったこの新聞は、強力な奴隷制反対の新聞であり、女性の権利、社会主義の実験その他のトピックスを報じた。彼自身は女性の権利の唱道者ではなかったが、にもかかわらず彼は、米主要紙のレギュラー女性スタッフとして初めてとなるMargaret Fullerを1844年に雇った。Karl Marxは欧州通信員であった。

1840年代に、首都に特派員を送る新聞はほとんど殆どなかった。編集者が時折取材のために首都を訪れることはあったが、新聞がワシントン記者を雇い始めるのは、政治が加熱した1850年代になってのことに過ぎない。ワシントン記者の大半は、半ダースかそれ以上の新聞に記事を書き、連邦議会の委員会書記や政治家のスピーチライターとして俸給を補った（Ritchie 1991: 4）。ペニ

一新聞の神話とは異なって、ジャーナリズムと政治の職業的世界は依然として未分化であった。

事実19世紀半ばの主要都市の新聞は、実際政党の機関紙であった。新聞は基本的に、政党のため様々な活動を展開した。例えば、新聞編集者は政治的後援に深く関わっていた。Andrew Jackson大統領は、50人以上のジャーナリストを公職に任命した。実際彼が上院に承認を求めた任命職のほぼ10%はジャーナリストであった (Smith 1977: 90)。1世代後のAbraham Lincolnは先例に倣った。彼は、親Lincoln紙のPhiladelphiaのNorth Americanの編集者に報い、彼の息子の4人に連邦職あるいは軍での昇任を与えた。もちろん、彼の新聞に向けられた実質的な連邦政府広告は言うまでもなかった。Lincolnは編集者たちを長官、次官あるいは15の外国領事に任命し、他をNew Haven, Albany, Harrisburg, Wheeling, Puget Sound, Chicago, Cleveland, St. Louis, 及びDes Moinesの税関または郵便局長職に任命した (Carman and Luthin 1964: 7-74, 121-128)。ジャーナリズムは、19世紀半ばの政治世界に深くコミットし、いうまでもなく独立の職ではなかった。

こうしてAlexis de Tocquevilleが米デモクラシーにとってかけがえのないものと判断した新聞は、党派的であった。彼によれば、「われわれは、新聞が自由を保障しているにすぎないと考えるなら、新聞の重要性を過小評価することになる。すなわち、新聞は文明を維持しているのだ」 (Tocqueville 1969; 517)。しかし他方でTocquevilleはまた、米ジャーナリズムの党派性もたらす暴力と下品/通俗に不満を述べた。Tocquevilleはまた欧州からの他の訪問者と同様に、米国新聞の数の多さに強い印象を受けたが、その理由を市民が参加する政府単位の数の多さに求めた。各州や村における政府単位の増加は、互いが協力することを米国人に強い、そのために新聞が必要とされた、と考えたのである (ibid.: 519)。

Tocquevilleが注目した政府単位の増加は、新聞に対する政府助成が増加することを意味した。植民地時代から、政府の印刷契約はまだ脆弱な新聞の財政基盤にとって大いなる恩恵であった。さらに新聞数の増加は、米国のプースターリズムと密接な関係をもった。進取の気性をもつ人びとが、数百という米の小さな町で新聞を始めたのは、人びとが新聞を求めているからではなく、新聞の存在が人を惹きつけるからであった。地方交通の要所は、将来の成長を見込んで、新聞、小さなカレッジ、大きなホテルをつくり (Boorstin 1965: 141)、新聞は、コミュニティの経済生活を「boostering」することに努力を傾けた。例えば、1857年KansasのEmporiaの町をつくった指導者は、繁栄するコミュニティのイメージを宣伝するため、直ちにEmporia Newsを創刊した。創刊号のほとんどは東部へ郵送され、生まれたばかりの町をPRし、それによって移民を誘導し、町の区画を買って定住することを期待した (Griffith 1989: 14)。こうして鉄道誘致の運動と同様に、新聞の創刊は不動産開発の手段であった。

#### 党派性の政治文化への反逆とジャーナリズム

こうして、ペニー新聞の神話とは異なり、ジャーナリズムにおける党派的な文化はその後継し、米国の政治的景観を依然として支配した。新聞は政党の機関紙であり、その政党の思想を明確に表現し、利害関心を表明する課題を担ったのである。こうした新聞は一方で、アメリカのデモク

ラシーを肥沃にし、公衆の社会問題への注目や政治参加意識を高めたと主張することができた。しかし他方で、これらの新聞はニュースを容赦なく抑圧、歪曲し、政治家の利害関心が、重大な問題の自由な報道に優先し、党派性が横溢していたのである。

ところが19世紀後半におけるこうした米国の政治文化は徐々に変化し、結果として19世紀末から20世紀初頭にかけて、顕著な変化として姿を現すことになる。米国のジャーナリズムは、この時期に共和党や民主党との歴史的な絆を断ち切った。新聞はもはや政党の「正式の機関紙」ではなく、党派的な活気に満ちた政治ジャーナリズムを否認した。新聞は、もはや政党の忠実な支持者ではなく、政治家の演説のニュース価値を判断するとき、冷静な評価の視線を向けた。

こうした変化の旋回軸を確認するのは難しい課題だが、ここで注目に値するのは、政治史研究者 Michael McGerr (1986) の研究である。彼は、*The Decline of Popular Politics: the American North, 1865-1928*において、この変化の基点を1896年の大統領選挙におき、この年の選挙以後に起こった選挙スタイルの変化、有権者の投票参加の減少、そして政党の政治的中心性の衰退を説明する。その際 McGerr は、政治の新しい文化史に基づき、有権者の行動に関する新しい政治史の標準的な統計的分析を、政治文化の「厚い記述」で補う戦略をとる (Kaplan 2002: 13)。

McGerrにとって、政治と新聞は、集团的アイデンティティ、利害そして社会的絆の発展において、ポジティブな役割をもつ。彼は、政治学に典型的な自然に見える薄い記述を再生産しない。こうした説明では、政治は、すでに一定の社会的関心を持ち、投票ブースに入場し退場する有権者から構成される。しかし、McGerrにとって政治は、シンボルや意味に満ちているのであって、政治は戦略的なアリーナとしてよりむしろ、意味を構築する活動としてより良く理解される。政治は権威主義的な稀少な資源の配分であるだけでなく、また公共的儀式を通じた集团的アイデンティティの構築でもある (Kaplan 2002: 13-14)。こうした彼の新しい政治史 (むしろ政治文化史) によって理解される19世紀後半のジャーナリズムは、ペニー新聞の神話とは異なり、党派性を19世紀末まで引きずっていたことになるのである。

この転回点を境に、米国ジャーナリズムは、新しいプロフェッショナルな倫理の土台を築き、その上に立って新しい政治的役割を再構築することになった。例えば、19世紀後半の革新主義時代の改革者は、腐敗した選挙を浄化したが、そうした改革は有権者から見て説得力のあるものであった。この改革では、忠実な支持者に報酬を与える政党の能力は、公務員制度改革とともに衰退した。すなわち、オーストラリア方式として知られる投票ブースのプライバシーが確保されるようになると、金と酒食で有権者に報酬を与える政党の能力は衰えていった。大衆的娯楽の商業的形態が深刻な競争を提供し始めると、公衆の注目を惹きつける政党の能力さえも衰退した。1880年から1920年の間、リベラルな改革者は政党忠誠を批判し始めた。リベラルな改革者は、選挙キャンペーン活動の新しい形態を促進し、パンフを以前より増やし、パレードを減らすことで「教育的」キャンペーンを推進した。同時に、新聞は独立のスタンスをより進んでとるようになった。1890年までに、改革運動が最も発展した北部諸州の新聞の4分の1は、政党からの独立を主張した。政党紙が、支持政党の候補者を「拒否」することは、当たり前になり、尊敬すべき態度にすらなった (Schudson

2005: 97)。

こうして米国ジャーナリズムは、公平性とパブリック・サービスの厳格な倫理によって立つことを、すなわち、ニュースの報道と調査において、特定の政治的利害関心ではなく、公衆一般のみを代表すべしことを宣言した。新聞は、政党の熱心な唱道者・同盟者から、社会一般のための中立的・独立的媒体へと変わった。このため新聞は、政治的見解を表明したり、ニュースに感情や評価を注入したりする、かつての多くの活動を放棄した。政治はもはや、新聞のニュース価値判断において、優先的項目ではなくなり、米ジャーナリズムは、公衆に興奮とドラマを吹き込む党派的情熱を放擲したのである (Kaplan 2002: 2)。米国政治文化のこの変化には、ジャーナリズムの情熱的なプロフェッショナル化が伴った。ジャーナリストは、ますます政党から独立する自身の文化を享受するようになり、自身のクラブや社交場、そして自身のプロフェッショナルな実践を発展させたのである。

## 結 語

ペニー新聞の「革命」によって、米ジャーナリズムは、党派性を脱却し、政治的独立を獲得し、プロフェッショナルリズムの倫理としての客観性を確立する道を歩み始めた。こうした言説は、米ジャーナリズム史の主流が今なお保持する歴史解釈であるが、本稿で明らかにしたように、米ジャーナリズムの党派性はペニー新聞によって消失したわけではなく、少なくとも19世紀末まで存続したのである。こうした歴史解釈は、すでに述べたようにさまざまな要因によって形成されたものであるが、それは、米ジャーナリズムの起源に関する神話を形成することになる。この神話は、現代の米ジャーナリズム制度の発展に関するもので、現代ジャーナリズムの理念や実践にある種の正当性を与えるという機能を果たすことになる。

ジャーナリズム史研究者の多くは、19世紀の半ばにジャーナリズムの革命が起こったこと、革命の内実や影響について議論は必ずしも一致しないにしても、革命をもたらしたのはペニー新聞である、という議論に同意しているように思われる。米国ジャーナリズム史の通説的な時代区分が、いずれもペニー新聞に特別な位置づけを与えているだけでなく、歴史的研究の対象としての具体的な時代としても、もっとも良く取り上げる時代区分でもある、という事実は、米ジャーナリズム史におけるペニー新聞の重要性を示している。この神話の厄介な点は、革命性を主張する研究者によって立つ事実は、必ずしも誤りとは言えないことにあり、この神話の特徴は、事実を組織化する方法、解釈の問題にあり、いわば歴史の単純化にある。言い換えれば、それらの結果として生まれた現代米国ジャーナリズムの起源に関する歴史的な言説が、個々の研究者の主張や意図を超えたインプリケーションをもち、米ジャーナリズム史を貫いていることに、神話作用の問題性が含まれているのである。ひとつの産業あるいはプロフェッションに歴史的ルーツを与えることで、かつ長い歴史の過程を経て現代のジャーナリズムにたどり着いたこと示すことで、現代的なジャーナリズムの基準を適切なものとして奨励する、正当化の機能を果たしているのである。

〈参考文献〉

- Alexander, J. 1981. The Mass Media in Systemic, Historical and Comparative Perspective. In Katz, E., & Szecisko, T. eds. *Mass Media and Social Change*. Beverly Hills: Sage.
- Barnhurst, K. G., & Nerone J. 2001. *The Form of News: A History*. New York: Guilford.
- Boorstin, D. 1965. *The Americans: The National Experience*. New York: Random House.
- Carey, J. W. 1974. The Problem of Journalism History. *Journalism History*, 1 (3-5), 27.
- Carey, J. W. 1989. *Communication as Culture: Essay on Media and Culture*. Boston: Unwin Hyman.
- Carmen, H. J., & Luthin, R. 1964. *Lincoln and the Patronage*. Gloucester, MA: Peter Smith.
- Chalaby, J. K. 1998. *The Invention of Journalism*. New York: Palgrave-MacMillan.
- Eisenstein, E. 1979. *The Printing Press as an Agent of Change: Communications and Cultural Transformations in Early Modern Europe*. New York: Oxford University Press.
- Emery, E., & Emery, M. 9<sup>th</sup> ed. 1999. *The Press and America*. Needham Heights, MA: Pearson, Allyn and Baconl.
- Griffith, S. F. 1989. *Home Town News: William Allen White and the Emporia Gazette*, New York: Oxford University Press.
- Habermas, J. 1989. *The Structural Transformation of the Public Sphere*. Cambridge: MIT Press.
- Hudson, Frederic. 1873. *Journalism in the United States, From 1690 to 1872*. New York: Haskell House.
- Kaplan, R. L. 2002. *Politics and the American Press: The Rise of Objectivity, 1865-1920*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leonard, T. C. 1995. *News for All: America's Coming-of-Age with Press*. New York: Oxford University Press.
- McGerr, M. E. 1986. *The Decline of Popular Politics: the American North, 1865-1928*. New York: Oxford University Press.
- McKens, J. P. 1977. The Limits of Progressive Journalism History. *Journalism History*, 4, 84-92.
- Medsgger, B. 1996. Thought without Thinkers. *American Journalism Review*, March.
- Medsgger, B. 2005. Evolution of Journalism Education in the US. In Hugo de Burgh ed. *Making Journalists*. London: Routledge.
- Mirando, J. 1995. The First College Journalism Students: Answering Robert E. Lee's Offer of a Higher education. *AEJMC Conference Papers*. Available online.
- Mott, F. L. 1962. *American Journalism: A History: 1690-1960*. New York: Macmillan.
- Nerone, J. 1987. The Mythology of the Penny Press. *Critical Studies in Mass Communication*, 4, 376-404.
- Nevins, Alan. 1959. American Journalism and Its Historical Treatment. *Journalism Quarterly*, 36 (4), 411-422, 519.
- Park, R. E. 1925. Natural History of the Newspaper. In Park, R. E. Burgess, E. W., & McKenzie, R. D. *The City*. Chicago: University of Chicago Press.
- Park, R. E. 1940. News as Form of Knowledge. *American Journal of Sociology*, 40, March, 669-686.



- Ritchie, D. 1991. *The Press Gallery*. Cambridge: Harvard University Press.
- Schiller, D. 1996. *Theorizing Communication*. New York: Oxford University Press.
- Schudson, M. 1978. *Discovering the News: A Social History of the American Newspaper*. New York: Basic Books.
- Schudson, M. 1995. *The Power of News*. Cambridge: Harvard University Press.
- Schudson, M. 1999. Toward a Troubleshooting Manual for Journalism History, *Journalism and Mass Communication Quarterly* 74 (3), Autumn, 463-464.
- Schudson, M. 2003. *The Sociology of News*. New York: W. W. Norton & Company.
- Schudson, M. 2005. The US Model of Journalism: Exception or Exemplar? In de Burgh, H. ed. 2005, *Making Journalists*. London: Routledge.
- Schwarzlose, R. A. *The Nation's Newsbrokers*. Evanston, IL: North Western University Press.
- Siebert, F. S., Peterson, T., & Schramm, W. 1956. *Four Theories of the Press*. Urbana: University of Illinois Press.
- Sloan, W. D. 1991. Perspectives on Mass Communication History. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Smith, C. 1977. *The Press, Politics, and Patronage*. Athens, GA: University of Georgia Press.
- Tocqueville, A. de. 1969. *Democracy in America*. Garden City, NY: Doubleday.
- Weaver, D., Beam, R. A., Brownee, B. J., Voakes, P. S., & Wilhoit, G. C. *The American Journalist in the 21<sup>st</sup> Century*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Wilentz, Sean. 1982. On Class and Politics in Jacksonian America. *Reviews in American History*, December.
- 大井眞二 1999. 「客観報道の起源を巡って—アメリカ・ジャーナリズム史のコンテキストから」 鶴木眞編『客観性 客観報道—もう1つのジャーナリズム論』 成文堂
- 大井眞二 2002. 「ジャーナリズムの思想史—リベラルジャーナリズム」 小川浩一編『マス・コミュニケーションへの接近 八千代出版
- 大井眞二 2009a 「メディア・ジャーナリズム教育」 津金澤聡廣, 武市英雄, 渡辺武達編『メディア研究とジャーナリズム 21世紀の課題』(叢書現代のメディアとジャーナリズム 8巻) ミネルヴ書房
- 大井眞二 2009b. 「ペニー新聞の「革命性」の神話」『日本大学法学部創設120周年記念論文集』(第2巻) 日本大学法学会
- 大井眞二 2009c. 「米ジャーナリズム文化とプロフェッショナルリズム—客観性を巡って」『政経研究』(第46巻2号) 日本大学法学会